始

特別贊成客員

岩代會津　眞風邊桑月
越後　雪札本宇藤遊我
周防　香園岸弘奕
阿波　松道本安藝嵩織

贊成會員

京　杉山徇拔
京　武田叉陽
京　中村金鐘
伊豫　三浦光包
越後　梶原五巓
京　藤波驢濤
京　安達乾中
、　山口竹陴
、　石田貴石
、　大嶋一梨
、　深阻千步
、　中川鵬六
、　井上詠月

會員

小西谷鵠風
豐後　安藤霞山
在東京　大久保魯天子
越後　二宮選广呂

觀風會餘興發句共選會二會目賞牌送呈人名

一等賞銀牌　京都觀風會員　石田貴石
二等賞銅牌　仝　足立白悠
三等賞銅牌　丹波國郡村郡立江　和泉里隠

明治廿二年三月八日印刷
明治廿二年三月九日出版　日發行
（毎月一回發兌）

○觀風會員募集候間有志諸君ヽして規則書被見御望之向ハ郵券貳錢御送付候ハヽ規則書寫郵呈ス

本誌ハ毎月廿五日一回刊行
○定價壹部金七錢○○京都市外郵稅壹部金壹錢○十二冊壹ケ年分前金七拾錢○○京都市外ハ郵稅金拾貳錢○廣告料ハ五號文字二十五字詰一行ニ付金三錢但シ十行以上若シクハ二回以上ハ割引ノ事代價及ヒ廣告料ハ總テ前金ニ非サレハ發送亦依頼ニ應セス○前金ノ期限滿ナテ御送金ナキ時ハ草紙ノ發送ヲ一時見合可申○代價郵便爲替ハ正行通運便ニテ御送金有之度右ノ便ナキ所ハ不得止郵便切手ヲ（壹錢郵手）承諾スルト雖一割增ヲ以テ送金アルヘシ○風雅上又ハ學事上外ノ廣告ハ定價ノ二倍申受ヘシ○端書一篇金五拾錢但シ一欄内ニ限ル○文章ノ長短ニ不及ヒ賞又俳文其他月並句合振草等掲載一欄内金五拾錢ノ俳書上適切ト認ムル文章及ヒ俳況等ヘ代價ヲ要セス登載スヘシ○和歌和文等同様タルヘキ者ノ俳句ハ必ス登載ス○詠草ハ可成種類ヲ分ナ判明ニ御記載可被下尚但ヶ敵薬御送ノトキハ一集宛雅名本名共明記載アルヘシ

觀風草紙餘興月次發句共選會

三月並題　土筆　長閑　雉子

審査員

翠れ本商香
薄椿合筆朴
枯魚登息水
九竹園青井
菱花園聽雨
竹泉亭源幾
白雀園正旅
紅葉園花笛
魁園貴公
書の本知古
嵩生堂一旭
菊の門家鶴的
六々園朝翠
大草園照女
賞雲亭稻媼

右之内差支アル者ハ會員代詠ス

本組ハ右ノ下段ニ隠スル宗匠家十五名ノ審査ヲ得テ一句ニ就テ三評以上通リ句ノ点ヲ合算シテ点高順ニ

甲ヲ一等トシテ　銀牌和入一個並ニ賞狀
乙ヲ二等トシテ　銅牌和入一個並ニ賞狀
丙ヲ三等トシテ　銅牌和入一個並ニ賞狀
丁ヨリ癸ニ至ル七句ヲ四等トシテ各賞狀ヲ

入花一題一句吐一組金五錢餘ハ一組毎ニ三錢增
但シ觀風會員ニ限リ入花半額タル、シ且會員外ニシテ丁指留ヨノ向ハ觀風草紙ヲ購讀アリタシ尤觀風會員ハ購求ニ不及

京都府下上京區第廿五組御前通今出川上ル　京都俳諧道場内
發行所　觀風草紙發行部
京都府下下京區第十貳組　編輯兼發行人　川島喜助
京都下京區第十三組貞安前町十四番戸　印刷人　桂田專太郎

○風雅萬歳

千載の一時。萬古の盛典。祝はへし。賀をへし。維時明治二十二年二月十一日は日本建國二千五百四拾九年目の紀元節。寔り此紀元節に當りて。我叡聖文武なる　天皇陛下には。欽定の憲法を發布し給へり。日本臣民に參政の權利を附與し給へり。我々日本臣民は歡喜極まりて。口自ら　天皇萬歳を誦ひ臣民幸福を唱ふ。唯夫れ万歳を誦ひ幸福を唱ふるに止まらす。手自ら拍き。足自ら起ち。鼓舞擬寵。且唱ひ且舞ふ。恰かも顛そるか如く又狂そるか如し。然し乍ら臣民爭か狂顛せん吾人何そ喪心せん。是偏に其歡喜の情溢きて止まらさるに出るなり。長く此日を以て日本臣民の吉辰とし。我々日本臣民ヶ偕府に納光肝膽ふ銘して以て紀念とあさんと欲そるあり。況や又大赦養老の恩典を布れ施さる、ふ於てふや。此日の狀況。紫敍の下を初め。府縣國郡德津村里。凡日本臣民たるもの拆舞踊躍せさるものなく。大にしては一府一縣の祭祝會となり。小にしては一郷一村の懇親會となり。祝炮に。煙火に。國旗に。運動會に。撃劍會に。貧民施與に。施酒施米に。音樂和歌詩文連俳挿花茶式書畫展觀。就れも祝意を表せさるはなし。我ヶ京都俳諧道場の會員たるもの。又是も日本臣民なり。最も至聖至仁の德澤に浴せるの遊民たり。爭ヶ拆舞踊躍せさらん。然とども遊民は宜しく遊民の境域分界を守るへし。啻に狂奔騒動。以て靜々たる韓事實を氣とるも豈能はんや。以て綽々たる壯士連を眞似るも又及はさるへし。宜しく遊民は遊民の分界を守るへしと。抂を以て。霽暦萬歳。文運隆昌。大文字を拜し。捧るに瑞草を以てし。一椀の茶。一瓶の洎。以て。天皇陛下の寶祚。天壌と共に無窮を祝し。日本臣民は地軸と倶に不變を賀し。丹心一片の祝詠を備へて以て。京都俳諧道場れ隆昌を。觀風會員諸氏の風雅增進を禱りて。當日の祝賀を爲りたり予觀風會員れ一分子たれハ。宜しく其席に列なるへきも

如何にせん、鎖港の策国を誤りて徒に他方に奔馳するのみ。然れども予は風雅には熱心あるものあり風雅の興趣はしらされとも、予は今宵俳道の衰廃と欽慨するものなど共挽回策はしらざれとも、想ふに事物の挽回改良は時期に乗せされい能はさるなり。予既て京都俳諸道場十七名の宗匠、觀風會員幾十機百幾十の諸氏に向つて一言せんと云。請看よ。日本近氏が歴史の夢双眼を得ふるは實に本年の紀元節ぶり。十七宗匠觀風會員諸氏は此紀元節に際し。何を以て得たりとするか。仮令十七宗匠會員諸氏は参政の資格を有するも。此會に向つて一の遊民なり。遊民にして政治を議りるは。固より其資を得たるものにあら只。然らは政治に關せさるものは。此日を以てお祝てさる日なり。祝ふべきにてありしと過去辭を以て之を抛棄したらんかっ否。時勢に抛棄すべから只。如何に政治に關せさるも。如何に参政の理なきも。此吉辰に逢ひ。此良好個に乗しては、風雅たりとも。遊民たりとも。必を一の紀念をなさるへから只。聞説。東京美術學校に於ては。此吉辰に乗し。教員生徒の服裝を改え。最も上代なる。最も美術の盛世たる。天平年代の右冠右袍に擬したるものを以て。一定の服制に規定せりと。是此盛世に逢ふて好時個をなしたるものなり。我宗匠會員は。呆して今日の俳壇を以て滿足せるか。遊行の洋服。近代の和装を以て滿足せるか如く。遊行の洋服。近代の和装を以て滿足せると一般。皆是も良知の新制を發揮せしも。元祿の盛世を希慕せるの諸氏なるへし。此良時機失ふへからす只。宜しく此日を仮石の紀念日とるし。此日より長く元祿の新制に復帰せし如く。風雅の新制に於ては天平の服制に於るか如く。宜しく元祿の上流に復回せん事を宗匠會員諸氏に望みて止まさるなり。

日本憲法發布式日の翌日　　金子詩枝識

憲法發布を祝し奉りて

いしつえやゝとけさ國の道普請　梅香
新らしき世代のひらけや年の花　華朴
世をけさと知る世樂しや明る早　魚水
豊とむや國の歌りを春の玉　青芹
降りかゝる雪も花なれ國のはる　堺曉
ひか草や廣きかうへの道しをり　正巡
初十ヤふのうためるる作り道　一腹
樂も富士廻る樂けんヤ日本晴　黒女
あらさる樂劇の梅のかやり蔵　旭水
よき風の吹て青むヤ春の早　雨雪
日のひかりのうけ國くやヤの花　碧月
松風も和る ひ創や鶯眠る　金谷
ふしかへてるひく樹や日和風　月郊
光くり遠ふ野の幸やはつ櫻　鯉友
よつこひを思ふりふの紀元節　蘆雀
和らうに吹風うるや春の風　糸雀
空百一樣に柳の深ミとり　好宝
樂も鶯へ花もるひかは此日和　雷
實に春のげしき整ふかまみ蔵　其石
春の風るひかは草もなかう兎　壺中
野に山にと、く恵ミや君の春　都六
日の光くミ受ぬ地はなき野若菜　金鐘
ひらけ行く世の組織ーや君か春　乾中
木に草に盾く光くミやはるの雨　貴石
を、ひ世やつれて智恵地雷の子　北洲
梅間ゝ日のたふとさや君か御代　雪花
君か代ふこと除く松や寿ヲ花も　稲見
世やたのし草の若葉のとゝら遠

憲法發布大典日の俳諧道場に
その會員を招た風流を開き
長閑さやゝ空の鶴の舞もとて　稲雄

○牛具半靈子寄稿のッゝき

高貴の方もあるへきえ非人は文字にして俳の字をとをせんり渡て鳥原ぢうかゞ玄蔵屋に茶をひさく歴の女にもその事迹れ多けれ俳てふれ曾ゑく俳にハイの曾ゑるを知若世に間呼る少かられ。その後り墓移るといへ。ものの書殘りて風流といへはちからを盡す人あり又長成の大家曾詞ゑるとと風流を盡ーける其之の謂き意味申もなか〳〵積々あり此道場此會此草紙なるにわたり別論者を述べ觀感ゑるへしと雖其他諸より季吟師へ傳へたはひし必事也俳に携るものは

又表新の俳諸と書改光たはひし其意味といへるはそれ俳　遠祖南柳天井川の辺りに住　無腹居　慈鳥
の字義非人をかそれて詩をはさとハイをよとせたる古今○　觀風押紙の發刊を保巻て
鳥の心にしたかひて真他詩もかゞは書邪りるはひしをよ
く感しなくら我新のいへら〉右師の其儀さ思あさりあり　慈后　春　友　麦　有　晋
て俳代字を捨始ひき我の又其詩にも誤にもよ少貝唯人に居ます。片刻の月の意地思るき雲に半くの春ゑれて淡田
あらさる程の眼しき法師ゑきの彼の人にわ少すの文字を　なル彩でを冬思し梅の接せ爺から宵豆しにも拘ら只
書てみさゝひ俳諧と改る物かりくき〳〵も詩にと社曾あ　こそくられて風に美ひかゝるにも拘ひません共師の梅
るを識りて俳と改るにあらそ言いやー光て俳とするどの　のまた詩しい有樣優い程屋を作る。まれや造化工夫の
るさへ其志のたくさしき事道師の業可仰々々ゆへは我　美術です。して高尚な美術とも言ひませうその美を彩色
俳諧のさよ風りて詩の字を書へし他門にさよふべから只　世界と美術の骨子とも云ふ可き山水極微の彫刻とされる
是別右人に導下てみつから人にあらずといへるにすか　世界と美術の骨子とも云ふ可き山水極微の彫刻とされる
うてありしかれ共も我徒たさ〳〵詩の字書とも識るか　。愛嬌の燈の靡麗とした姿で。盛も飛揚い空嵐も汚れま
ち事右人の書給ひ一側もあれはあり上常〳〵光し給ひ　せん消滅な呼吸に意匠か洗はれて工ミに吹魂が動きさそ
し事のありかたなきい我ゑがら行後の業の爲に其言葉は　。この面白き夢この優美な春に生れさしさと觀風て人押
ありのさゝを記し晋右　戌のとし九月十五日書其負　紙です。春と共に新しい面目高尚な意匠。記ろれか草紙の
右師傅の書をよせる者ハ　京　都　牛　具　半　靈　浮でを。婦人なちは妙節ともいへませう。清て優美て
○觀藝日勤ひれい必を成と宜ゑるかな沿の稲蔵うして俳　優らしい十七れ文字で綴られて居ます。さて詩歌文
道ふ志し厚ゞ勤光て益友を得んとさきに各位の肯花像と　章の接個場を浮鑑にされて居る。さかも老録ゑ詩大家の
の句百名とものせられ一に日ゑらす次編ふ及ひ出編名勝新録蓋　。其の他詩鈴はまた幼稚であり
又は全國名勝風俗部國へ本紀句ども一冊ひ社員よりをさも。　。春に生れて餘日はありません。又指の歌場に逃く
れ事と信れは數力の写とみに編り寄編詩相哲の稿を東山れしよ　れしよ髮黒な。古。おくれは取ら以承紙の持編。ても時
に建んをすれい賛成者續々として起り成就す實に寸しの日ど氣　の日ど氣編に編なされはその能かなロと次放を待はかりて
俳事を勤る盛んなりといふべし編みるひ京都俳諸道場をす　です
周元觀風會ゑるものを起一俳學を研き詩水行脚の便に備　あの晩れの實値にもせよ松の花
へ觀風押紙を發兒し亟く俳道の實を全ラ〳〵　道新の萬他○　觀風押紙の發行
に報せんとせらる　詩治陽ば名勝古跡はさゝるありあらゆ　敬よみ島のやからうに好又本のかやり会なら以此文遊ひ

ら日行く世に俳諧道場を設け観風草紙てふを月々に編みそ何ハなくとも後進の俳徒を者に変と光へらし居だる只て自謂の嘯くさまてて仁志の気脈を通はしめ乞せちるゝ中へ師匠として投込ゆるるとかの伊勢の初雪もやと投ちき貴雲亭のいふやしたゝへ観の海の面をみたしめ菲の林見れは之をん自の京都る貴雲亭宗匠氏たび俳諧道場とひの命毛示く風乎菲小日菲のいとの千尋につゝかむ邪を所ちき観風草紙てふふミともの丸て毎今此道に海へる紙客リコトかきせ紙ちせ

番や四方にはつと朝日の梅林　　徳俊　清倉庵逸粕

○観　詞　　徳俊　清倉庵逸粕

こたび京都俳諧道場といへると試け観風草紙といふ雅號を掌し桔野の命を採りて島の外なる紙を綴しみ石廻の波○京都俳諧道場並に観風會の設立と風ふ

にちかひて明らか治とる世を風ひさせへる風士詠客の玉詠芳詞好文を編ミ自方の風安をみすゆ益俳道の運盛から大れ俳諧の世に同会を興ふる事い更に曙々を要せずと雖

んとをはからるゝ貴雲亭大人の羽扇を感して　　も近来文學の進化に伴ふれ自為右腕の青年輩い風雅を鉄

樂ーさ花の書くはる事の凱　　樂物死取物の如くに論ずれ共是彼らに血風に走りるるの

相風草紙賦詞　　甲斐　梅庵　白陽　　空論よして俳道風雅の眞髄を知らざるものあり凡人たる

貴雲亭の主石雄大人去年の初霜の頃東山に風呼の樹を設ものの道徳の長理を称讃せるへからを想ふに元禄の風

奇せられ二百年忌を営まれたるの未曾有のいさホーー香る呼の遺詞も皆之に外ならをして日進月明の今日に欠くへ

に俳風俳諧道場を開き観風草紙てふ紙誌を登録して四海うらざるの道あり況んや嘉頃美術の盛振して特に美術

の風士に交際を厚う厚ちー初心をーて此道の奥に導き俳學校を設ゞて美術宗を興成し往古の美術品を保存するに

遊の塵盛既量多ふん事を願ふ。は風呼の尊意も花の塵動ひるの世に於ておや蓋し風雅い美術れ内都を支配そる

にて其よろこびのいはかりを感嘉の余りにかくなん　　の一分すにーて美術の同胞とも情ー美術に密着ハ関係を

名どころの花や幹ざへたくさーき　　有したるものあゝい益々風雅の道と擴張して美術と對等

○観　　京都　乾　中　　併立せしむるは今日の急務なるへし　京都の地は天然に

貴雲亭のあるしは俳道に志ー深くーて年に月に風安の便　高雅の風教を形成して美術古器物に富み美術工藝宗ふも

りおらん事を願かり種々の編冊を編ミ此道のた光力を盡そ　しから只世人是を怖ーて京都は美術の温巣なりとゝふ

ざるゝ中にもみたび京都俳諧道場を開き観風會を設けら　貴雲亭稲雄宗師も技に感ずる処ありて此度京都俳諧道場

れ～は貴ふ風流の美事といふ可しされい此道たのしみ　設立し日頃俳道擴張策に率先鬼踊せらるゝ

此流さによるも試ゆ貴成せずんはあるべかゝず　　ふも併ゆら只胸一歩を退先て益々此道を研究し併に観風

手伸みて相撲りるや鳴の雷　　曾を起して観風草紙を發兌し頼ふて風雅の道徳を世に普

○　　小椋　徳風　　及せしめんとせらるゝ其美挙ゆる誠が賞賛せざらんや質

ふのれ去年の秋の始より會席外れ演あるりあそひありきに道場は櫻花の如く観風會は明月の如く雖か此風光を味

ふとし一月十あぎり二日といへるに浙々帰り来たるを期ば　ゝざる者あらざらん必ず俳道の隆盛ゆ赴き　風雅の徐

友行詩の孔雀くも同郷とのと光つりしとて頭ひ来れるに　光と共ゆ道場及ひ観風會の世に卓立そる日近きにあるを

と予期ーて信ずるあり且て欣喜のあまり一言所感を述て祝辞にかゆ

満足の我のミてかー花に月

○正風俳諧の道に異ふゝへを盡して観風紙を

あみいさーさる貴雲のあるを稲垣宇治をたゝ

へことして

花の咲はるにあふ世の詩かな　　若代　桑月

○観俳諧道場

初鶴の盛音風味より眼覺かな　　甲斐　白陽

○観風會設立賦詞　　若狭　百花堂　雲濤

世は開化に進ミ人い勉強に傾き其道に稗益ある文書雑誌の世に行はる、貴に文學の戯場とも謂つへー愛に稲雄貴雲亭雅士は俳諧れ爲に道場を開き新奇善良ある紙誌を發行ー奇文鈴章の芳詠を蒐集して初學を誘導し　風詩の高尚を世に輝さんを希企せらる、其厚志を歎美ー聊敬意を述て賦詞に換る

貴島や朝日をのせる年の先

○　観風會を賀す　　摂　北松　洗

●京都に俳諧道場ゆるを建設せられ月々観風會をひらき神紙を發兌せられて此道の日々隆盛ゆるを祝ー観風といへるを嘉安て

見る物のなふも富染けり春れ風

○　賀　　豊　後　宗雀

京都の貴雲亭宗匠は俳諧をれかんになさんとて道場を設けゆとゝに會員の集る事日にまーぬと子もその趣のはしにがへられんとみをのろみて来ゆる年柴て五ゆ五を綴る

神垣や梅のに日ひも只ゆ寸

貴雲宗匠の俳諧道場を設立せられーを慶の雲

にゆと信きて

開く戸にざゆから匂ふ初日蔵　　對馬　登雄

貴雲亭宗匠の立志を賀す

是程に繁盛るもれか無の花　　讃岐　世外

道場と開き観風會を設けられしを賀して

改暦やあつさる庵の神心　　越後　凉泉

観風紙の發兌を賦して

世に廣く東風を配るや東山　　羽后　米山

観風紙發兌を賦して

香れ梅肝の中さて　しミる程　下総　柳月

観風草紙の一號をなかた其美編にして体裁ゆ

佳良ゆるを感して

竟すへき石ゆり花ゆと福壽草　　伊勢　任夫

ゆさい貴雲亭の主人京都俳諧道場を設立せられ益〳〵

風交れ盛んゆる事を賀ゆる賦詞ゆ換て

植かへて朝日の照るや梅薫る　　越中　露心

俳諧道場のりしを賦して能

能き道の開々て嬉し梅の花　　米陸　意慶

観風草紙の發兌を賦して

咲初し日から續くや花の道　　長崎　雷久

観風草紙ゆ益々盛大なるを賦し

日ゆ匂ひ月に匂ふや梅ゆ花　　越後　鹽海

貴社益會を賦し

曳蹴ひするや小松の千代八千代　　豊後　三英

御題

水と石い川の世ゆのちきり歌　　信濃　宗仙

かはらて八しよろつ代迄も

寄鳥懸

そゝとゆく鳥の音そうゆ夜ゆから曉の詩

ゆ矢く鳥の音そうゆ　　上野　元知

世治文事興

波立ゆ御代は続ひてもし度草す

ゝゞの海にかきゆつむ鶯　　越后　孝順

雪の梅

淡雪に埋きなからも今ころとゝ

はに色そくれゆひ梅　　越中　厚子

隔春布穂

動きなの備るはるやいづる日の
にほひにもれ初始光ふるらむ　京都　寶池

ふなし

春は暮かの光く風におのづから
にかふ朝日の光くみなをしる　仝　玉蘭

海邊霞

網曳とる舟の胴のみきはへけり
ちりのうらはも今朝い霞て　仝　重浪

早春梅

ともすれは風なた寒き窓の外よ
梅う香たりき春の動　仝　曹芹

福地に無事ある兄の古稿を寶して

雅流淀に時めく梅の匂ひうき　「静江」巴　丈
ま〻ふ鶯若き庭の黄鳥　螢笠　丈
手料理の青磯脂ふ盛器て　笠
清き流まふ市浸すあり　丈
やうやくに身うし月の淘夢り　笠
そよきなからも白萩のさひ　丈
ゆたかなる秋を光あてる宮書請　笠
風呂敷よりは笹の掘よき　丈
初産を思ひ猶りに仕濟して　笠
あさりをいつも具てやる弱　丈
若空に梅雨の土稿の深ねかり　笠
月代宮をはゐ〻苗角　丈
見晴しい流石好みの二階ふり　笠
篠にかゝる灰のさく〳〵　丈
世と捨た後い眼食沢居士衣　笠
人に請れぬ蟻蟻に隠る〻　丈
盛手の暗方から瓦る花の鬚　笠
翌い島の打終りらし　笠

以下次號

腹風草紙を開きて

見る毎よ繁ふやさ且相か鄙京都一服
いつれ弱ら四時ぢうくひ且
海山も春の景色のと〻のふて
ともは四人に無事を請る〻
名月いすきても結ぶかさの法法
穂よ穂の稲よ露の冷やか

以下次號

寓居相定光て

初明り富士いや〻き先見冷る　東京　永機
はつたりと小鳥も鳴且汐晴り　東京　詩竹
梅白し雪の雲のかとし種　東京　機一
鶯の光くるも早き野梅薫　東京　梧尺
水ぬるむやとつ〻青き柳か鄙　東京　蟠城
春女や雪も花かと見る斗り　東京　昭陽
ちゝいとや川の向の家の窟　大坂　不角
畑主の梅折りま平且餘寒薫　大坂　鶯笠
寶鬼やあたり人さが且盞処　大坂　寧鼠
藪影や天氣の宮る春の水　大坂　湘逸
下り坂や藪の間に〳〵赤椿　大坂　桐陰
能程に家居へたて〻野れ霞　大坂　須東
万歳の休て居るよ小松原　大坂　月人
思切て霞のか〻る外山薫　大坂　北叟
咲時て一手に白し山の梅　大坂　南齡
捕始の雲寄能なり寄二す　尾張　羽洲
黄鳥や風やり越して羽くろい　名古屋　杜鵑
松や光る夜とはなり鳬鷗月　尾張　荷庵
茶の実あろかと垣根吸き鳬　持北　松洗
つく〳〵と裏日の葉の貴さよ　東京　桂花

吉野竹林院

雲の夕日に暗や庭のふけ梅　津　如山
柏手の遠近にして初日の出　参河　露香

梅香やあさの塞さもひとおぢり　加賀　塞谷
予と設けし觀

花歌もふ〻てにがふや詠の梅　加賀　雪鶴
元日と知るか雀も早う鳴　能登　野朴
どう見ても静なる此柳蔵　越后　旭扇
今出来た家にしたしき乙鳥蔵　同　雷湖
あたゝかなやふでも塞一春の風　同　遠广呂
若餅の塑も美〻青松葉　同　凍泉
杉村且やう〳〵明て初霞　同　有竹
朝風呂のこ平れ加減や松の角　同　逸我
儘なら四身に事多しとーの暮　丹波　春齊
初空やきなふの裏はなき日より　同　遊虎

泊舎にて

かもやにい問たかしちん初鳥　因幡　可雷
一月や蔵にき且しき俳物出雲　同　幹
雪れ散る空もるがめや年の花　美作　且さる
曾起るあを人くさや初鳥　同　冬青
星ひとつ見ゑてぬれ止び鳥がな　備前　松露
初空や内はをもーの明り歌　備中　線苦
鶯しさい口にあぢり丸今朝春　安藝　三東
ひとつ短日がけもさわし冷の茶　同　山絵
さ〻空の色定ぎら且初鳥　周防　甫静
門ぢつや梅も台の仕としらへ　同　波竹　朗

近江石山

宿とりて又ゆく山やはるの月　同　波逸
風のひさ雨の隙なりはつかそみ　讃岐　梅晴
花といふ物のはしめか福壽草　伊勢　五嶺
初櫻見るろよ老ぢ腰伸て　豊后　乙人
山寺の寂しを香るや海苔の味　同　成雲
健話と月も有明撰り鄙長崎　霞松
月花の種よ初日の東山　筑前　霞岡
こやるゝや散るや野梅の折遠き　同　道丸

月並發句田毎集

二月之部　あふち庵稲處宗匠撰

福壽草にまけぬ香のあり梅の垂
藪引て里に入亭ミ雀哉
一朝も朝過さなし鶯老鶯
正月も練て移てしけり片在所
起さるゝ聲借て春の雪解哉
不足を道きや梅わりあり
一夜ざにたつ一聲初蛙
山寺に似合ぬ彼岸櫻哉
凧のさふく風に聴々り
夢聞て見れは雨夜の歸る雁
住家へさし出る軒の梅哉
咲たなは悲ふれ来てころ初櫻
かゝり凧鳥も雀も来す成に鳧
家よりも低き梅の姿哉
何もかも待つたらがして初櫻
鶯やをつと匿さる銅盥
子供にまよ似ぬ知恵出をやら掛り凧
樣紙ゝ別れて人を通しゝり凧
猶忘れ一てもよき日を花に鐘
流れ込し鮭にとゝる見かな
不盡向し富ふとも旦れ初御空
書雀鳴野、眼鏡きや雪の日枝
明は桜のもとか朧月
人止児て語は一光るや春の雨
路の臺一ッ見出せは又一ッ
郁落て水鳥水よ沉みげり
見たさいふ喉も可笑や初櫻
角揃てかんたやうを寛の顔
若草に寐て客待や渡し守
青柳や日に〳〵高き水の音
ふいと立旅や柳の青む朝
泥足の人も受るや花筵
枳殻垣道たらりと伸る柳哉
朧月梅はまだ〳〵匂ひけり
山見へて里に置けり春の雪
春の水たつぷり雑て流れけり
松島のつゝきあふたる霞かな
蝶起になり又後に寄り畑の道
今日も又見ぬ行不二の霞かな
初午や歩行かためしぬかり道
妻し子のかくし酒や二日灸
雨の日か蔵柳の姿かあ
見る物は柳はかりの堤かな
きうへは我田のやうそ陽炎哉
まさの下と流る、雪解哉
踏ゝめの見出し〳〵めど上巳の臺
初午や人に押されて〳〵刈る

第三
稼からも掃出す花と成にけり

軸
静まに鳥も来て居る柳哉

巻一
戸叩く辻雨ふた蝶ふり朧月

追加
塩よて顔実つける柳哉

越北　肥前　備中　伊豫　安藝　阿波　東京　肥前　周防　美作　駿河　上總　若狹　備前　備後　七十五翁

橋洗　我慎　巴川　白泉　月郊　きぬた　五蝠　仝　草雨　仝　きぬた　里曉　糸雀　我慎　五蝠　曾天子　糸雀　指月　里曉　敲月　白泉　里曉　白泉　善秀　其龍　圃月　白悠　其龍　白泉　千步　桃酔　楊月　芦雀　曾天子　雲鶴　五蝠　楊月　草雨　馬角　九十九　白悠　其鳳　絹多　曾天子　敲月　月郊　糸雀　桃鶴　きぬた　白泉　稲處

催　ふち庵　田毎社

月並發句蟲集

二月之部　栗の本梅香宗匠撰

見心は朝よ梅にねる、月
明る戸の袖措て出るつは先哉
雛の子のつよい嘴しや二日灸
凧とも羽子買ふ紛れや二日灸
凧買に行と近道へ觸れに鳧
梅が香の谷に廣かる夜明哉
すきゝ顔を忘れて居るや凧
春の人酔て郷へ這入音
品川の春を咲鳧櫻海苔
鴨はあく鶴遊しや梅の妻
梅いるめ椰よ得し於篤家哉
初蝶の心もと香於行衛が鄙
梅落て水鳥水に沈ミ鳧
數あんと思ふ梅もかすミ鳧
蝶二ッ別れて人を通し鳧
紙鳶の手に覺えさる餘寒かな
見込るや旅へ進る子の霞むか鄙
窓明て見れは雨なり歸る雁
野、ミとり空のミとりや暗雲雀
加茂川に放して見たき白魚哉
もふ何が降ても春よ梅のはな
人なれてさく寄梅のあるし哉
追ひつけは道よふ人ふり朧月
蝶ひぞ汀まふ鳥らり又ひぞなつ
郁さるる使、發宿て春の霞かな
玉霰のなりまちゝに春の霧、
山里や霞なからに貫昏る
早せらひやどふ摘之てる長短
松杉に背ミの出るや念れ霜
花とまつ心よたるや雨のおと
朧夜や香も有さうな角田川
日直て花の縅めくもりかな
菜花や笠の裏迄日の匂ひ
乙鳥や風よふ身の給り
芝山は笑もはやし雨二日
てふ二ッもつれて出たり畑の中
手枕や雨の鶯聞なから
川瞬も雨へ飛日や揚雲雀
白梅の雪に氷るや朝の月
乙鳥や巣に居わすり臼の上
常見せぬ雪の肌へと二日灸
二日灸嫁から先へ二治めり
鶯の陽は日はなし妙春庵
黄鳥や光ふ障子に戻る影
戀猫や黒に心の氣も寄せす
さして来た宿も留主也春の月
一と雲をれは雨降や花が鄙

第三
もゝちどり暗や千ぞせの松柏

軸
鶯や淺き流れにうつる戀

秀逸
養笑入をとちぬも親のなさけかな

追加
梅咲やけふそ月の十五日

安藝　阿波　仝　美濃　阿波

昇　草　月　草　壺　一　壺　白　燈　仝　月　梅　燈　鯉　指　清　糸　草　月　清　里　月　指　稲　月　白　燈　草　壺　仝　昇　里　草　月　鯉　草　月　鯉　白　鯉　白　草　稲　里　燈　昇　一　白　月　仝　梅
雨　中　雨　中　色　中　泉　柳　郊　落　柳　友　月　泉　雀　雨　郊　泉　曉　郊　月　見　郊　泉　柳　雨　中　曉　雨　友　郊　雨　友　鳥　友　悠　川　見　曉　柳　色　泉　郊　香

催　栗の本　蟲社

月並發句香染集

二月之部　薄柿舎華朴宗匠撰

青柳や風に安陀物の賞ひもの　煙柳
踏ふのか見出しはじめよ梅の甚　月郊
にるゝとも梅の種より春の雨　梅年
数よ何か梅てもなよ梅の花　里暁
蝶先に成りわとよ成り品遊　阿波　草雨
貴鳥や聞かぬ先から風のゆどり　安藝　梅暁
日直りて花に誦の鶯かか　里年
品川の春を咲けり櫻の里　田月
月に聞見せて眠るや亭の庇　草雨
梅さる実郎にかしうき家かな　月苑
物忘れするや粧ふ對に出て　全
轉ひ靄も仕安くなりて梅の錦　梅年
上手より下手に変らし手は達明　白泉
出代や晴間を太や眼の乞　札洲
てふくの鋼や物の上草の上　白泉
春れ夢の名残くを遍り月　千歩
海苔汲や男ませりの土蒲　翅松
見心も朝によ論に湘の月　白泉
不盡尚し常はどれとる初の空　煙樗
夜提て来さ灯に用の降き　梅年
何所の往て来さを夜すから春の聞　芦雀
初雷のあとや静なり根のき　草雨
光る時わるや誠に雲表　月郊
魚祭る湖の毛もれや朧月　蓋茫
初蝶に殺もつられて眼の主かあし　北洲
人物きて紙ざく春の眼の香さけ師　月
数入ととめぬも眼の香さけ顔　全
はつ霞立や雲もつ里かゝら　白泉
ひひ安きもらひもの患路の蓋　伊豫　五顔
初蝶心もどかき烏かかの寺　月悠
暖もつき畑も打ち患寺男　白年
茶は焚て有に留守也桃の宿　梅編
ひと夜さに唯さ二聲は蛙　五月
若草や人にふまれし跡もあつ　田泉
筆にもの言せて柳の主かな　白郊
年魚も飛来るや花の道落ち　月暁
忘れしてもよき物を花に風　里雀
葦ヶ陽炎吹出す土の肌　蓋清
俗読の手に煙立る除夜か　美濃　濃暁
てふ舞や不二見てぬらす旅衣　里友
人知らぬほどの夜雨初櫻　鯉郊
まさくと山の崩れ心あたゝか　月
霞り日とする日のあり御忌の鐘　全
来ふかし落角あり蝶山　白悠
念入て打は大凡なはさけかな　北洲
啼雫と鍋返しや猫の妻　白泉
風満まひくし西山ひかえ山　鯉友

第三
うれとなく来てみて嬉し初櫻　五扇
軸
春なれやみしかき噺長う聞　千歩
秀逸
貴鳥ヶ五尺の鶯も水の音　里暁
追加
飽かぬ野におきて日永泊りかな　薄柿舎　華朴

催　香染社

月並發句梅香集

二月之部　枯魚堂魚水宗匠撰

初霞立や雲もつ里あり　昇泉
慈の子の一日ぞ二日灸　白利
くれ一つむ里やまはらに梅の花　真郊
初ゝや夜も似たなふ恋しれ　月泉
睦は赤くふ鶯返しや鶯の塵　近江　白暁
てふ舞ふや不盡見てぬらす旅衣　里見
杖突てうそみの数を登り兎　稲洲
霞む日や非術にかゝる鳥のふん　阿波　白悠
鐘も捨き畑も打ありち寺男　白利
雉の居てもみゝろきを月と俯　真柳
柴の戸や暮て乙鳥れ巣に屁　煙友
長さゝや茶店片手に糸　鯉泉
紙鳶らゝや手てふ鶏たる除寒海上　清扇
寄らゝかや手に飛ひ居る除寒　工洲
雷の雨春の寒の波れけ　美濃　北雨
宮明て見れ雨香り降ら　伊豫　草悠
常て見せぬ泣の風を二日灸　安藝　白郊
初雀ふの野の心元かさ行か　月暁
切れ凧のうくゝ涙に紛れけり　里雨
森の人酔て鄙へ入りけり　草悠
小奇麗な里ヶ鶏ありの月　白雀
戸叩く酔たる羅有春の月　糸雨
風て手綱は見れ宿寂かな　草泉
起きるゝ豊悟ては行足袋の日　清郊
酒よりも利日のはやし二日灸　月編
道子鳴やて携ふて角わり山　五洲
来たうしてれ翔のもとかり山　北悠
さゝやきれ翔のもどかり月　白泉
春風ヶ一里の旅よ日の暮　白
水ぬるむ川ヶ入かけてよるの影　全
春立やまさ一つけ学の袋かな　伊豫　鯉友
数入と泊ぬも親あさけかな　清
我里へ帰りて京の霞かな　我
子供には似ぬ智恵出すや掛り凧　稲友
明しらむ潮くもりや鶯の聲　糸泉
さゝ張に打込うひく鐘の聲　梅里
霞む日やわざと長らふ雉子の声　五見
とつ花の咲たる嬉し手紙かな　月雀
手枕や雨の鶯聞あから　梅利
青柳の雨も懐くか舟のか　草笠
水に色のとりけ見ゆる彼岸かな　真雨
きれ柳をはなれて青ー遠櫻　五利
青柳ヶ釣して遠く長堤　北扇
落着て田に行く鳥ヶ朝霞　米笠
古葉より春雷けり蕗の塵　全郊
きぬ裏の郷快しけ若れ風　全雀
第三
梅くる光郎にやしき鶯家かな　全笠
軸
はつ雷ヶ島々鳴く島のあた　梅
秀逸
見たい、ふ睦も床ーヶ初櫻　白悠
追加
まゝろなゝ子れ晴なりに観雀　枯魚堂　魚水

催　蕉流社

月並發句明々の集

二月之部　九竹園青芥宗匠撰

角の垢落て潮まつかすみ哉　備前　海居
春の水たつふり植て流れけり　伊豫　五扇
後うつりして智ぶ増すや流れ子　安藝　草雨
静さや海苔あふる夜の軒　月郊
かねも擁畑も打かり寺男　白悠
追付れ逢ふ人らし朧月　指月
きぬ渡の際こゝろよし春の風　米玉
正月もてくらしけり片在所　白泉
はくと煮た雨晴て雛子の聲　草月
青柳や長人ちょゝ込る堤　五編
春二日や人ちよかるより辺り　月郊
如月や人よ押れて眼の頭　九十九
初午やからうしての遠く鳥　糸苺
冷かや人よ押れで眼頭る　草川
梅さもその手ふ除けし霞哉　清泉
紙居しき手抜まなけの花の花哉　全
鳥ヶ鳥へ除て春の鶯や嘆れ　月
鳥宿の中に日の夕くれや鷺の嘆　九十九
貴鳥ヶ除つれあの方の川の川　米玉
見はそき泣よ富士見てける空　五月
蝶は泣やして朝も仰の旅　碌暁
永き日や思ふ日のひとの月　里月
菜の花に思ふ柳もの花の落　里雨
鳴へ減り初ぬ柳もかするの臺　草月
数へやか駆せぬよ起さる虜　草友
出代や何降くて遠りは鶯か　鯉暁
最開ふ空高く出る鶯一ヶ影　全
長閑さも空高てる影の花　里
飛火よもやく雪ふ鶯に雪　阿波　鯉月
野のみとり空る霞とうやの蛇　美濃　章
艶はれど出る浮世や穴の雀　指月
きれて春は見と来まぬ朝の山　月郊
其まゝ見れ霞は灰り玉の山　章
来合せて柳めど成りけりに二日灸　鯉友
若の子風のかゝれる立い花　全
乙鳥や風のよ鶯やえ朝月　昇
戸あの成るる寒さら春ら風　月
卒子のうこ黄島ちしの鶯か　きぬた
手を何ぬの雨の見て雨の落　月郊
早子やとう霞の白晴帆る鳥　草雨
菜の花か見る雨や白帆る鳥　九十九
見るもか見て美し小島の鳥　草居
迦ひのまる越しの鶯か初の声　梅郊
清やもすみか見て鶯ヶ初の吉　月
夫ぞなく来て見て鶯初吉　五顧
第三
窓明て見れは雨也帰る雁　草雨
軸
俵聞は蘇の遠音や朧月　備前　其風
秀逸
朝月を見掛て寒し梅の花　礎
追加
梅も最ふ一昨日ちりて雪の果　九竹園　青芥

催　清風社

月並發句若葉集

二月之部　菱花園聴雨宗匠撰

長生の雨果報もちけり梅の宿　白泉
霧の春寒さもれ流子のけ　北洲
朽ものかつ日くれて蝕の根　真利
きたやかし有角なわり川山　白悠
職たの陰しぬよ出掛の山　近江　白泉
梅忘れや落かよけ野も花　美濃　白泉
物の香すら伏もゝ蛭よ出て臺　清郊
古葉のすらる寄鶯の鉢よ　月
庵の春もうく人の誘み　全
切みを落ねやはく海に沈みけり　其
雷りせぬやはう霞を梅の香　草石
馬ため屁や朝ふゆへ小梅日炎　安藝　白雨
見たりもて眼よれ口の霞か春霞　伊豫　五笠
静人きいやいよゆうかし初櫻　北扇
底鳴れつか春り情五十鈴川　白石
は聞れて木に吹ふてし流れけり　北悠
長講や凧つ情を称ち流りけり　真洲
八に吹かい凧さ高き吹雨　越中　五利
竹代れはるく風都也春れ雨　白洲
年代は許ふはる月二ち影　越中　岱郊
出代や許れよそには句ひ哉　月岸
しめる戸にたるは梅ひ咲　真泉
畑打や夜の人毎に遠きて　北岸
はるまた夜ぬ人わるか寄る鶯　其郊
小机をれ力合手やに日寄る鶯　白友
その夜まよ手や二日の霞　月岸
きくを雨に雨哉と物しつか　岱郊
出代や常に寝心物しつか　鯉悠
迷くと雨に替り杖の月　月石
選水にはみと降れしもすみの山　淡洲
雪水やれうめ降へしてぬる山の短　真利
春の夜や笑ふ雨へたる行灯　里水
驚やも踏でくぬ行かれ灯　草郊
山里と田にあくれよ鶯の鍋　阿波　華暁
ぬるむ田またく黄鳥や来ぬか　北雨
梅かたしまて出て居る男な　全
水たんびも没て出代も来ぬ眼　真笠
うくひすやめ吹き子の咲　芦利
見こ、めたて除子にほ屁　草
数へんとて何か鶯戸に帰る鳥　里雨
わめ夜や蛙のぶけて灯る影　真友
初やわれてむれけて家のさし　里利
驚や来れて朝の待ゝ盗きし　北友
行雁ちゃ海くもりお眼れ別れ　白利
てふれどう笑ふ有かれ上　北悠
第三
か、り凧鳥い寝に来す成にけり　糸雀
軸
牛れ脊を足して梅折童かな　北洲
秀逸
華鳥の色香もぬれて春の雨　五嶺
追加
起されぬ虐骨ま涅槃像　菱花園　聴雨

催　若葉社

月並發句若菜集　二月之部

甘泉亭珖曉宗匠撰

[illegible]

第三 蝶のれて出るも浮世や穴の蛙　里曉

秀逸 起さるゝ覚悟て春の寝疑哉　月郊

追加 二度に見る噂は本末梅柳　仝

はる雨や枕にさわる一節切　珖曉

催 甘泉亭 [illegible]社

月並發句若竹集　二月之部

白雀園正祇宗匠撰

[illegible]

第三 乙鳥や巣に居あまりて日れ上　鯉友

秀逸 風軽し巣立そゝめれ枝離れ　月郊

追加 池の水雨降足して温みけり　里曉

長閑さや茶店よも賣釣道具　正祇

催 白雀園 若竹社

月並發句東雲集　二月之部

紅翠園花笛宗匠撰

[illegible]

催 紅翠園 [illegible]社

月並發句青龍集　二月之部

六々園朝翠宗匠撰

[illegible]

第三 乙鳥巣みあまりて日れ上　鯉友

秀逸 春は夜や笑ひ出したる行燈れ灯　芦雀

追加 はる水たつふり積て流れ苑　五蝠

くもる日の紙鳶見へたり途[illegible]　朝翠

催 六々園 竹外社

月並發句魁集

魁園黄公宗匠撰

二月之部

[illegible]

伊豫　安藝　美濃

初蝶に心もとなき行衛哉　月郊

畑打や寄合て一休み　稲見

見たといふ人の庭し初桜　白悠

追加

暮遅う思ふて花を待日哉　魁園 黄公

催 浄教社

月並發句花光集

菊の本知古宗匠撰

二月之部

[illegible]

美濃　伊豫　安藝　阿波 讃岐

うくひすや来て今朝は待遠き　圓月

能園は瞑ふ人を二日灸　其石

花鳥の色香もぬれて春の雨　五扇

追加

誰を来るやふて寐られ春の霄　菊の本 知古

催 旭昇社

月並發句算砂集

喜生堂一腹宗匠撰

二月之部

[illegible]

伊豫　安藝　阿波

芝山は気ふも早し初二日　全

鶯や五尺の雪も水の泡　梁徳

花を待心にたるや雨の音　壺中

追加

冬ならの日南ひろふて餘の梅　喜生堂 一瓢

催 一喜生社

月並發句翁集

菊酒家無的宗匠撰

二月之部

[illegible]

伊豫　美濃　安藝　阿波

早咲やどう摘ゑて長短　草雨

百千鳥ゝ千歳の松柏　秀邑

影ゆくや動かぬ水に春の山　静月

追加

放つ矢もぬかるゝ射場に蝶一つ　菊の家 無的

催 友朋社

月並發句草萌集　二月之部

大艸園照女宗匠撰

[illegible]

第三
發父入をと知ぬも親の情かな　仝
嫌はれに出るも浮世や穴れ蛇　里鶴
秀逸
霞の芽や打〱小涙に見へ隠き　壹中
追加
吹請ふ風よ光りや夜の梅　照女

催　大艸園　文艸社

月並發句苗代集　二月之部

黄雲亭眉雄宗匠撰

[illegible]

第三
水に迄ゆとりの見ゆる彼岸哉　草雨
軸
嗣られぬ子よ氣築して接木哉　阿波　里曉
一首
青柳や山里ちから水所　貞利
追加
月白し櫻ふらりと朝の色　稻雄

催　黄雲亭　早苗社

同審査上座句

鷺社本評

地いく日ともおもふや春の雨二日　周防　善秀
天松風に日の入るさとのよがん哉　月郊
追加ちらひけで見るや餘寒の顔の色　判者　梅香

薄柿舎評

地この雨に先の見へたる餘寒かな　京都　其石
天つれ〲や柳はかぜにやしき雨　仝　月郊
追加芽はる枝をさへて寡る餘寒哉　判者　蘿朴

枯鼎堂評

地窓た〻く柳むすんでまつ夜かな　京都　白悠
天松風に日の入るさそれ餘寒かな　月郊
追加ふき替しとら家にそはぬ柳かな　判者　鼎水

九竹園評

地はろ雨やうらにの歩行く渡月橋　素入
天蘆の芽の水切り込る余かんが香　京都　貴石
追加まさ起ぬ土手の茶店やはる寒し　判者　青芬

菱花園評

地はるさめやぬれた鶏の一つかひ　豐前　力水
天大空のいろよしたかふやあき哉　越中　露心
追加降Ｌのつよきにも似えばるの雨　判者　聽雨

廿泉亭評

地降もはなはる〻も花やはるの雨　其石
天うつ雨のやうにもどり餘寒哉　美濃　清泉
追加ばる塞まさかる丸のあらし山　判者　琢曉

白雲園評

地春さ匁や灯ともと夜に暮る〻誌　大津　米丸
天野と色いやあきのつねよ朝の月　京都　白泉
追加仲さやら輪のやとどさる柳かれ　判者　正流

紅翠園評

地戸をさしてきけは音わり春の雨　月郊
天雪ちら〱余寒の月夜なが　京都　龍山
追加蘇る氣てれせぬ手まくらや春雨　判者　花師

菊の本評

地散みしにひかる余りんの水田哉　美作　其龍
天青柳やさよみのとれし風の吹く　越后　鼎譜
追加見て居れはま〻ろやとげる柳哉　判者　知古

魁園評

地月の出でしつかによく柳か那　京都　稻見
天はるあれや雨も見にゆく東やま　〻　〻　鯉友
追加夜あらしに海の音きく餘寒か那　判者　貴公

喜生堂評

地茶に肥へののかる背ミや春の雨　荒雨
天窓さ〻く柳むすんでまつ夜かな　白悠
追加代掘離のかほに日のもる柳かな　判者　一眠

菊の家評

地塚もまたさひす余寒の川千どり　京都　好宝
天柳た〻青しあ先にもかすみまも　白悠
追加ねらひ込む矢に一葉ちる柳か那　判者　無的

大草園評

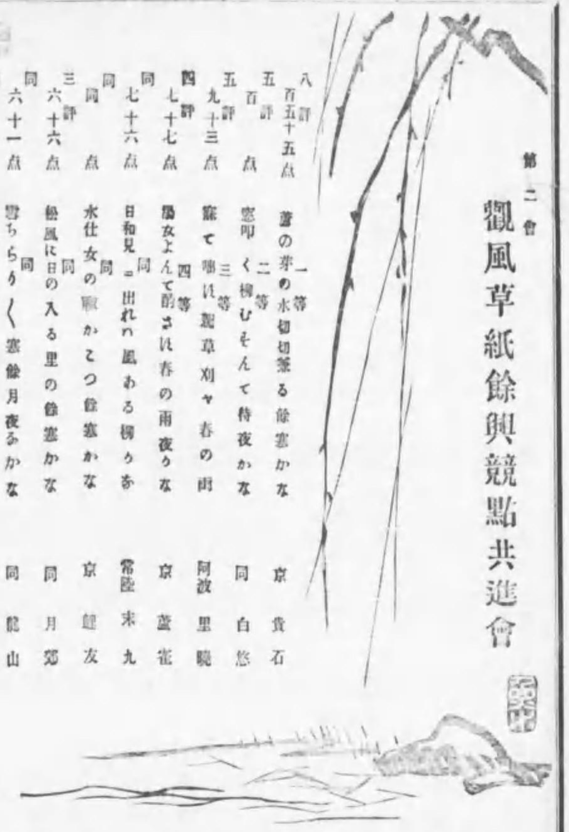
地雨にうひかせにそひが柳かな　津松　洗天
天水鳥のみつをとなれぬ餘りん哉　月郊
追加野も山もかみすふくくて春の雨　判者　照女

黄雲園評

地春雨や不意と出來たる茂の輪　好宝
天まつ風に日の入るさとの餘寒哉　月郊
追加はる雨や友の來るまて筆をとも　判者　稻雄

第二會

觀風草紙餘興競點共進會



一等 蕾の芽の水切落る餘寒かな　京　貴石
二等 窓叩く柳ひそんで待夜かな　同　白悠
三等 窮て啼く鶯草刈や春の雨　阿波　里曉
四等 農女よんで酌さん春の雨夜うな　京　蓋雷
八評 百五十五点
五評 百点
九十三点
四評 七十七点
同 七十六点
同 点
三評 六十六点
同 六十一点
同 六十点
同 点
三評 五十九点
同 五十八点
同 五十七点
同 六点
同 五十六点
同 五十五点
同 五十四点
同 点
同 点
同 点

日和見に出れば風ある柳うな　常陸　末丸
水仕女の眼かこつ餘寒かな　京　鯉友
桜風に日の入る里の餘寒かな　同　月郊
雪ちらり〳〵寒餘月夜るかな　同　龍山
雪もまさる寂す餘寒の川千鳥　同　好室
春雨や昼りに富ー東山　伊豫　蛙水
沙し呼聲に也動く柳かな　京　壺中
そりかえれば低に低のあるぬ餘寒かな　同　霞松
押出して悠の戸しめる柳うる　近江　真利
捲られて水もぬるむか江の柳　越后　雅籌
汁の實にとかく苦の餘寒かな　越中　露心
都まで寒に来たやうそ春の雨　讃岐　世外
三日月の落て暮たる柳かな　京　其石
風呂の沸音も氣味よき餘寒かな　越中　岱岸
春雨の餅かな　獅花　松洗
遠退けの退く霞みよき柳うれ　大津　玉人

第二會

祝體國神社奉集額

本　黄雲亭稻雄宗匠撰

一等 神にかもひき深し松の花　大坂　騎風
二等 初霜やたしなた物に日のあたる　丹後　清風
三等 冷〳〵と山遺涼し今朝の秋　伏見　半江
四等 ぬるひやら水際歩行鴨か鄙　近江　楠人
五等 古けれの古い音そる國語が鄙　大和　梅朗
六等 寄生木の勝手かさしき若葉哉　河内　時山
七等 芒うら月の出を見る小家うな　近江　芋州
八等 隣りうら蟹借りに來る田植うな　飛彈　露玉
九等 見物のゆるき出した角力う鄙　越後　馬月
十等 鶴て着船はかとらぬ霞か鄙　近江　其風
十一等 暮る日に眼の散され鳥想かも鄙　伊豫　光水
十二等 門松に雲の來る山家かな　伊勢　青枝
十三等 神原や露に埋みし竹一把　仝　桂月
十四等 鳴い無松い凋ふて初日の出　東京　丹蕾
十五等 長閑さや散ちやうたき能の鳥　丹波　椿光
十六等 衣更衣のふさも落にけり　摂津　豊秋
十七等 下駄や風氣發しの門歩行　伊豫　五鶴
十八等 苔かと見れい花なり女郎花　大坂　鼎甲
十九等 牛の背に小雨の降る夏野かな　京　喜得
二十等 雨の日を好む客なあり社若　大坂　曹枝
二十一等 錦木と鶯に禁中よ玉子酒　東京　絃鳴
二十二等 さゝ濁り泉に鶯とぬ鳴る鶯　越南　如水
二十三等 子になれと云鶯の出す手鞠哉　京　芝山
二十四等 陣家の嘯かさしさと今日の月　阿波　橋浩
二十五等 賞人よりつよき賞人や初鰹　美濃　花月
二十六等 どつさりと見物めしや秋の花　信濃　蘇遊
二十七等 信野藤遊ぶ客遠うる　仝　桂月
二十八等 桜本松蹴鞠る宮遠うる　伏見　近世
二十九等 ちか〳〵と春も二月に成れけり　伊勢　青枝
三十等 寒さなる冬やえくりの昔水田　羽后　蘇月
三十一等 拾へたやすな人あり鎖代守　近江　蕉居
三十二等 雨降りに雪はかりなる門鎖　大坂　花鳥
三十三等 腰かけもせてひつかし花櫻哉　城南　和星
三十四等 身を捨る神喰もあるや在祭　大坂　靖寂
三十五等 宮心や遊廓詣し殿の雨　吉田　錦水
三十六等 どム見て生下駄が雪所踏　仝
三十七等 美しき蝶よも飛ぶ迷鶯哉　遠江　文鳥
三十八等 海へ出て舞戻りする鶴かな　仝　蓬雨
三十九等 宮寺や虎杖太き堂の前　伊豫　里笑
四十等 下手ものかと面白さうに踊けり　岩城　桃川
四十一等 走り越雲面白し冬の月　京　閑水
四十二等 年寄の笠さて古き田植歌　大津　春山
四十三等 見尽しる跡に又ある木の子がな　京　錦花
四十四等 篭向へい蟬の出て來る草家かな　武蔵　露山
四十五等 鶴汁にかか一一入い寺男　大坂　雪の家
四十六等 蝉のする人數見へぬ茶摘かな　尾張　蓮枝
四十七等 ひと筋の流や秋の行楽　近江　蕉下
四十八等 植て是く竹や鶯を花心　坂本　一笑
四十九等 春風や鮮子のはーる檜の上　大坂　塞水
五十等 五十嵐の日も定光鬼事和　小倉　旭峯
五十一等 遠道をして遊れけり梅の花　筑紫　水石
五十二等 怪影を杖に蕭寂の浮寝ふな　鶴岡　鳥仙
五十三等 手をえ光て蔵しう世ふ花御堂　武蔵　術笑
五十四等 ひと木とい見へぬ與ふり鶴月　長崎　勝山
五十五等 涼しさや浮風程ふる家ふから　常陸　京山
五十六等 微兵の子に影膽の蕭寂蔵　石見　鹿肇
五十七等 今一度歌天て鶴ん除夜の空　豊前　力水
五十八等 落葉した谷の尖に能かる　能登　一政
五十九等 紅一色に秋の深こる紅葉かな　野馬　松籌
六十等 若葉して明り遠よや別座敷　越中　松年
六十一等 春風や麦角にかゝく苺の先　越後　花山
六十二等 神社留主稲宜も何所やら出と蛙　備中　秋郁
六十三等 若水を心よ浮かむ顔もなし　豊後　三笑
六十四等 皆か皆苔はかうや辻か花　備前　松翁
六十五等 蒙霧て雨宗所事に思けり　美作　其友
六十六等 紅前てあどい柳れ青み蔵　豊後　江郷
六十七等 勝へも無浮世勝かり五月雨　備中　絲香
六十八等 日長りや寺へ蕨に行畑の人　下毛　凸百里
六十九等 日長がら窓き風吹紅葉蔵　豊後　陵東
七十等 鶴頭や無骨に切し菜の跡　弘前　長清
七十一等 試る茶れ色香あり青簾　備中　緑苔
七十二等 眼に付や踊り上手の京浴衣　美作　曲水
七十三等 月涼し座敷に竹れ蔵く影　筑後　露梢
七十四等 合点ー牛もどゝまる清水蔵　越中　月松
七十五等 名月や霧にわとうと水の中　仝
七十六等 手鞠の捨ひ物なり時鳥　讃岐　松雨
七十七等 朝顔や月の消込花手桶　豊後　啄橋
七十八等 春の水精のやうに流れけり　備前　不去
七十九等 雪の人遠音ふて別れゆう　讃岐　結山
八十等 日の影に書かけ客や花反り　豊後　一石
八十一等 蛍の日暮に近し座敷先　信州　保橋門
八十二等 寒深き畑や結髪女郎花　京　正美
八十三等 涼しさや迫て居る子もよゝ奥ふ　讃岐　霞月
八十四等 惜り物ゝやう本手雷や冬の梅　武蔵　其通
八十五等 名月や足のはゝ程面白き　和泉　水卜

名月をゞ出して寂る山家哉　濃飛世外
出代らぬ自炊しや寺男　豊後梅遊
七夕八幡鶴で者の行衛かな　京　文晴
線〳〵もあり寺に遊ぶや淋しき　濃飛三風
雲の穂に花散かゝる林下りな　丹後清風
夕貝や何か遠恋て暮て咲　近江草洞
草茫し折〳〵風ゑ吹かから　遠江琴風
朝貝や見はる中に殖てある　越後厚川
見もなく起かゝ蓮は昌好かな　濃飛白雨
寺の名を名には客や初夏の空　尾張奈枝
明易き後の明渡る林かな　濃飛白雨
和歌や水の薬喰をぬ明の空　全　同
蓮の花は直所小さく成にけり　京　水
蟬しさや年仕舞して茶一服　信濃
竹賀の若葉て来さり山路秋　大和鬼斗
初秋や涼しかやうな空の色　信濃鳥光
静さよ花の中行水の音　武蔵桃林
水馬月や初恋なし蝶れ蔦るより　伯耆可然
水音に風の隠るゝ桔梗かな　筑前三休
若竹や蔦も車の落る音　京　雅山
別荘も下ろして春を待夜かな　信中蘭節
踏出せの一里も蔦を春の風　濃飛百鳥
風長て子にせ光られぬ宿鶴き　出雲樂翁
高低にあこと蔦の山路かな　越後志淡
蟬が身の幾度蔦るゝ日永かな　長門北友
打水あかれ〳〵れば多き往来かな　武蔵松里
逃逃に別れて這入茂り蔦　越後月舟
花を待顔の撫ふや春の雨　越後明同
一人住居の蔦ゝや雪の家　美作嘉聚
茶の味も老るやさはら月に雲　長門湛水
月高う渡して雨の夜明かな　上毛靖一
のどかさや鶏鳴清し蓋処　佐世保鹿牙
赤〳〵と花にも見たら紅葉かな　越中梅下
笠寺を出久建ふや夕時雨　越後長旅
爆撃て柱に寫る灯かな　筑後琴楼
夜陰や草に酒吹白拍子　遠江竹鳳
日を孕ミ〳〵濃かる牡丹かな　美作秀月
持出してあるや遠見の涼ミ臺　越中愛
廉て見物起てい春を待子かな　長崎音玉
葉咲て秋にしはる、日鶴かな　越中露角
川物の家や間毎に月涼し　伊勢五鶴

百

船はへや花昔白妙沢草　京　巴水
遠の昔あゝもぬらさ目醒れけり　青蓋雷遠
旅人の旅に泊るる日永かな　東京月仙
春立や鶴に乗る程に鳴雄かな　信濃拭月
山も田にする程に鳴雄かな　陸奥梅年
温泉の客の戸をさし寂る月夜蔵　伯耆竹山
人来ねば鶴のぬ日もある門前蔵　濃飛花兄
去ぬやうに川を言ふゝ蕗茶かな　武蔵柳所
涼しさや川へと傾ゝ二階の灯　筑後花々
海を言ふる蔦に来知る蝕市うる　東京母巻
月の出て信手に花の櫻かな　東京母巻
紅葉の淋から見ゆる鐘りかな　佐世保四生
よる神の見ゆる淋の陶かな　常陸宿三
今回くけしきや富の牡蠣　伯耆草月
蔦の香や日毎に蔦る蔦蔦　美作可水
留元の日の日蔦かし乙島　越中松雲
黒上りの蝉に涼しき蝉蔦かな　東京孤鳴
長ゝなる蔦しや梅に月さして　若狭紫石
蔦にも火の恋りや蔦の花　東京蓮水
夕蔦のして舞ふ秋の山　常陸常水
蔦に蔦の隠るゝ桔梗の匂かな　相模清竹
蔦蔦　稲雄

百五

見てある富士の遠間見野かな　近江其風
蔦も負も丸り出来けり雪丸々　越中可風

紀行　相處宗匠撰

蝉ヤて若鶴よかどちゆ霧がな　越中露甲
蝉蔦き蔦蔦て一日暮にけり　大坂鼎甲
三蔦屋に蔦さゝ道の前かな　伊勢青枝
朝見れば蔦蔦てあり料理屋　石見山水
初秋に蔦に一光て知るを起心　吉田鶴水
蔦るゝ蔦思見て高し春の山　近江蕉千
蔦ゝ人を思かゝ月の現れけり　羽后窓水
蔦の蔦も耳に陽ら白花見かな　羽后新月
見せだ鶴見遠る鶏の主か鶴　東京巴水
梅のある隠から水のぬるミけり　東京萬樹
長刀の鋒の光りヤ二三丁　武蔵露山
蔦いれ見ゆる鶴乃瓦かな　阿波竹鳳
流〳〵と思へい暮る紅葉かな　豊前蔵松
二里茶てもまさる霞のあり夏の旅　豊前蔵松
万戈の稽古仕て居る時走かな　飛弾千司
植て遠去ぬヤ日永の植木賣　長南和蔵
蚊帳釣らぬ福一涼き山家蔵　全　笑
寄年ヤ塞かるくせに朝早き　越前喜
生垣に水打過て今朝の秋　伊賀鼠山

十

紀行　相處宗匠撰

近江蓮居
角力取も小さゝ見ゆる塞かな　出雲柳川
やんのりと霧の夜明ヤ春の風　京　松蓮
鶯ヤ雨の流る、雪のうへ　近江雅水
人の赤き庵りの様ヤ散紅葉　八幡頁月
明て行木々の深みヤ夏鶴　京　銀鶴
跡追ふて可愛からる、蔦子かな　大和梅朝
口真頭にあさへて来るヤ雀の子　全
野れ見へる北恋ゞて仕舞けり　大坂鼎仙
雪見ても塞ぎ無き日ヤ小松曳　近江其風
扇にも見る草鳴ヤ旅戻り　小倉想雀
接木する人の姐しヤ花の頃　大坂鱗
夕立てがら殖ふ々り人過り　全　窓月
蔦の穂に花散ちかゝる中うな　丹后清風
蝉取のふちに手もあり辻角力　美濃紙虎
鶯の主笑ふて示代戻しけり　吉田鈴水
水よ降鬼浮がヤ思ひ鬼　伏見桃年
樂しさヤ年仕舞仕て茶一服　備前清雨
ぬるむヤら水際歩行鶏蔵　姫路紅
雨の日と好び客あり杜若　青枝
家鴨の鳴さヤうなり蔦の浦　越前吾嶺
朝貝やへれて無き世の仮住居　近江松花
輪に乗ても柳い長し年の市　能登一歩社
さゝ張ヤ四海静に初日影　越後空海
内に居て客の心ヤ三夕日　備前蔵月
鳥羽い降伏見の晴る時雨蔵　豊前聖水
田草取笠白鷺と並び鬼　常陸竹祭
中をる外に雪赤き紅葉蔵　安芸如川
暗もせヤ鳥の立けり秋の暮　豊後雪操
いろ〳〵と変ヤつして踊がな　美作宗志
静なり雨に乗へても春の水　常陸竹達
下京い田舎めいたヤ白木槿　美作其龍
鳥の茶て蔦蔦しみる柿蔵　因幡梅年
手弘の肩に水るヤ蔦呂戻り　佐世保一花
時雨るヤ岸を蔦る鳥一羽　加賀孝聚
茶に年を寄らせる鶏の主ある　伊豆静岡
化粧した子の遠慮そる西瓜蔵　尾張一蝶
雪間に蝉鳴替て多紀　備中文英
蚊帳ヤ昔蚊有だぬ家いなき　駿河一蕊
落る遠蔦りのヤうな柿かな　周防文江

十五

紀行　相處宗匠撰

枯魚堂魚水宗匠撰

名所の鶏けり雪の東山　大坂鬼斗
青柳ヤ鳥かぬ水に鳥く影　丹波草月

十五

花活た中の跡ヤ朝茶の煙　近江蓮居
明てある松葉れ上ヤ春の雪　丹後清風
今朝後た水つさゝる、氷蔵　出雲柳川
一杯の土と成て陶器がな　近江雅水
僧程の日和積きヤ麦沢秋　伯耆山山
京へ着日の曙ヤし花盛　近江其洲
蔦の花にかゝる提の埃り　大津春峰
何もせず早午時よなる小春蔵　丹后清風
茶日より踏さぬ蔦ヤ苦の花　京　巴水
七重八重霞て春の行衛蔵　京　文晴
ぬしふみに飯深一松の花　大坂鱗
雲雀晴ヤ愛らい夏の涼ミ所　出雲樂翁
白露や鳴津の里の朝朝　備中蘭節
蝉ひらにいつ廣ゝりて春の朝　長崎蔵鳳
蓮の香に引れて泡を迎り鳥　東京丹蓉
明も引後の水ヤ天の川　加賀雪谷
包れし里の静げし初霜　越中修竹
灯の前る風墨て居る結蔵が鶏　越后萩洲
戸をさせは疊へ上る窓かな　濃飛桃翁
冷〳〵と山道涼し今朝の秋　伏見年江
年に鶏長なて行日永かな　伊勢櫻坊
雨の日ヤ水鳥の叩く裏の門　美作梅朝
迫とても辰い世界ヤ稲雀　豊后荷淨
下手なから面白さうに踊りけり　岩城桃川
一人住居迫りた戸春野うる　東京風鶴
東京風鶴　東京　山
小豆嶋梅玉　京　山
若水に盛る、星の光りかな　能登稲司
雪のある小川詩々て涼ミ臺　相模南洲
捨てあるやうな西瓜の迫かな　水石
行年にさし掛へなき山家かる　全
花の本芹舎宗匠代

紀行　百花園太抑宗匠撰

春の水樽のやうに流れ　鶴津不去
清田見て居る後へ地がゑ　京　巴水
秋景しさた蝶子も花て遥る　尾張葉枝
物見る色い風ゑき日和蔵　近江遊居
夏だれヤ蝶う流る、水の音　鶴津不去
柚田て飯にぬる手の紅葉　大坂雪の家
朝夕に隔りの霞む山家かな　遠江琴風
日和よし只ひら〳〵と秋の蝶　伊賀光水
蔵る程蝶ゝて雪の夜明蔵　若狭里梅
霊行に知らる、秋の別れかな　京　水

十五

紀行　百花園太抑宗匠撰

近江蓮居
角力取も小さゝ見ゆる塞かな　出雲柳川
やんのりと霧の夜明ヤ春の風　京　松蓮
鶯ヤ雨の流る、雪のうへ　近江雅水
人の赤き庵りの様ヤ散紅葉　八幡頁月
明て行木々の深みヤ夏鶴　京　銀鶴
跡追ふて可愛からる、蔦子かな　大和梅朝
口真頭にあさへて来るヤ雀の子　全
野れ見へる北恋ゞて仕舞けり　大坂鼎仙
雪見ても塞ぎ無き日ヤ小松曳　近江其風
扇にも見る草鳴ヤ旅戻り　小倉想雀
接木する人の姐しヤ花の頃　大坂鱗
夕立てがら殖ふ々り人過り　全　窓月
蔦の穂に花散ちかゝる中うな　丹后清風
蝉取のふちに手もあり辻角力　美濃紙虎
鶯の主笑ふて示代戻しけり　吉田鈴水
水よ降鬼浮がヤ思ひ鬼　伏見桃年
樂しさヤ年仕舞仕て茶一服　備前清雨
ぬるむヤら水際歩行鶏蔵　姫路紅
雨の日と好び客あり杜若　青枝
家鴨の鳴さヤうなり蔦の浦　越前吾嶺
朝貝やへれて無き世の仮住居　近江松花
輪に乗ても柳い長し年の市　能登一歩社
さゝ張ヤ四海静に初日影　越後空海
内に居て客の心ヤ三夕日　備前蔵月
鳥羽い降伏見の晴る時雨蔵　豊前聖水
田草取笠白鷺と並び鬼　常陸竹祭
中をる外に雪赤き紅葉蔵　安芸如川
暗もせヤ鳥の立けり秋の暮　豊後雪操
いろ〳〵と変ヤつして踊がな　美作宗志
静なり雨に乗へても春の水　常陸竹達
下京い田舎めいたヤ白木槿　美作其龍
鳥の茶て蔦蔦しみる柿蔵　因幡梅年
手弘の肩に水るヤ蔦呂戻り　佐世保一花
時雨るヤ岸を蔦る鳥一羽　加賀孝聚
茶に年を寄らせる鶏の主ある　伊豆静岡
化粧した子の遠慮そる西瓜蔵　尾張一蝶
雪間に蝉鳴替て多紀　備中文英
蚊帳ヤ昔蚊有だぬ家いなき　駿河一蕊
落る遠蔦りのヤうな柿かな　周防文江

三　折々は眼の端の蜻蛉かな　京　文晴
三度鳥嶋見に行燈かな　攝津　沈翠
雨もふる庭から直に枯野哉　小倉　旭巖
障子越雪明り利く机かな　東京　金花
鴫とれはよくしら萩の花　阿波　竹登
涼しさを闇に隠れぬ水の音　仝　仝
立鷺を去かと抱へて時鳥　京　桂月
買人とまつよ尺貴人ヤ初鰹　近江　兎月
十　雨の降去に出来し柴山子かな　東京　竹[illegible]
河鹿啼頃ヤかまかに説の音　小豆島　[illegible]子
観も手もていらひとつよ早苗舟　播磨　有終
紫ヤ心のゆるむ日のゆるみ　對馬　蛙水
有明の星より高き芒かな　甲斐　松鳩
備ふれハ位の付ヤ鏡餅　美作　竹山
表音に夜ハ更てあり秋の月　讃岐　葛谷
聲待の鳴し尽ぬヤ風呂の中　安藝　鬼一
近よれハ水音もある紅葉かな　美作　其松
若水ヤそつと汲勝寂合井戸　武藏　桃齢
日のかけの有とも見へぬ紅葉哉　札幌　楊水
初花ヤ朝参りする神の庭　越後　如翠
大粒な松の雫や秋の月　仝　財川
晴切て窓の尖とし多の月　備中　歡月
居譲の辞去年の嘲に戻りけり　豐后　鶴年
廿　手に取れハ白し若葉の朝雫　越后　香雨
只にさへ淋し肉を暮の雨　紀伊　桂圃
障りある月の光りやや多木立　但馬　晴隷
傘にふれ浮る、萩や切通し　遠江　翠松
霜ハ内外に削れハ無けり　長門　左角
卅

祝　五舛庵百可宗匠撰

雲水のとゝのふ秋の光か那　尾張　白鷗
明島比夜の明渡る林りな　仝
追　行春や樹限けハ鍋牛　東京　琴月
軸　心よた空の明りや初手水　攝津　春樹
三　名月や露の明りを海に置　越后　馬月
散らぬ物りと思ひる、牡丹哉　大坂　花濤
去ぬ雁や雲隠れにし月明り　京　閑水
枝の雛捕へハ梅の替かな　近江　松雪
鵜ても花の鳥な吉野山　安藝　一壺
晴切て風なき空や稲の花　大坂　眉英
鴨嘴や遊様にさす塔の影　武藏　太玉
ひつかしら這入口なり多精　越后　静蔵
撫子ヤ桃の上のみほれ砂　長門　如風
元日の家風を嫁に教へけり　能登　秋郎社
十

澄切た日立紅葉かな　讃岐　流鄰
旅人の笠忘れ行小春かな　津輕　弄月
賑はしさやうて淋しき花野かな　伊豫　眠蝶
宿取て海を見に出る日永かな　加賀　[illegible]亭
大きさを言て来る子や盆の月　伏見　鼠[illegible]
廿　柴垣の結目むすひ光や春の雪　豐后　一歩
ゐるむ丸太を流とや谷の水　備前　二竹
名月を〆出して寐る山家かな　讃岐　世外
幾ゆも流れ行ふへて水温む　伊豫　五嶽
時鳥若葉の庭の夜明かな　丹波　椿光
入る影を柳に残る夕日かな　備前　松翁
時雨るや松に夕日のさしなから　豐后　龍泉
萩咲や異なる原に人の出る　京　巴水
馬嘶や雨降る音も夜終ら　備中　勝居
旅人の供に歩行や秋の雨　越后　調星
早う立月日の中の日永りな　遠江　秋峯
卅

歡　橋月庵鯉友令師評

首　月の海心一はい詠めけり　攝津　鬼洲
軸　松はかり月とも枯野かな　大坂　翠斗
三　藤咲や日数へる旅の空　參河　鴨居
擱出したやうに揃うや丹波栗　札幌　西湖
鳥居から内の冷付哉りかな　東京　よし凡
追加　碑の文字のわくく讀る時雨哉　鯉友

歡　船遊舍芦巻令師評

首　活ける花無りゝ白牡丹　東京　詠月
軸　露晴て見れハ梅て無りけり　越後　旭山
三　雪見ても暮らさき日や小松曳　近江　其風
兄弟と見へぬ印籠の襟かな　伊豆　壺玉
壹数柱にあひせかけ、余り水　遠江　翠[illegible]
追加　待篆ゝ花れ嫌りと成にけり　[illegible]雀

歡　菁莪堂白悠令師評

首　なつかしき曾よ時雨れ檜笠　大坂　雅阜
軸　よろよんで居るを見ゆるや初鶏　和泉　仙遊
三　白羽の花散る中や櫻鯛　備中　鶴外
冷くと香の花よひ清水かな　越後　璟燕
沙道の際立色や春の海　駿河　可正
追加　稗よさる、花の雫や朝の月　白悠

歡　松之家糸雀令師評

首　松露の稗光る春日かな　大坂　潮流
軸　家内皆手の放されぬ霰かな　京　三扇
三　白菊や筆にものらぬ朝の艶　東京　秀宋
餅を搗掩にハなりし師走かな　伊豫　春曙
長閑さをのせて行なり車牛　常陸　可昇
追加　碑の發句寫して戻る日永かな　糸雀

彌生園月郊令師評

首　初日の出松から雪の雫かな　和泉　木卜
軸　賤買や町珍らしき草鞋掛　大坂　鳳虎
三　見る内に廣かる雲や稲の花　仝　仝
船の灯の寝眼に涼し蟹歩行　伊賀　新蛙
散る沙汰に二度驅せたる櫻かな　對馬　一葉
追加　春寒し碑近寄れハ何とやら　月郊

夜紅庵鹿月令師評

首　月の秋稲の秋あり頂磨け瀬　河内　松月
軸　鳴る時遊る船ある花火かな　堺　梅渓
三　ある丈け雲れ時雨て月夜かな　越後　松雨
雨風に追廻されて尾越鴨　堺　梅渓
鼓入や痛れ嫌ひを攀らる、　伊豫　音つら
追加　夜に入と提灯いらす花の道　鹿月

卐字窓指月令師評

首　檜笠にも山路あり土用干　淡路　一翠
軸　明方の一際凄き霜夜かな　紀伊　松雪
三　里々や稲苅込て夜を更す　常陸　修竹
夕立てから殖にけり人通り　大坂　窓月
初秋れ雲か、りけり稲葉山　羽后　琢壷
追加　笠抱て立旅人や花の蔭　指月

花橋庵柳枝令師撰

首　待心あまりて遠し近い春　豐後　素居
軸　かまひひかふ出れハ際立豪が那　岩代　杉星
三　舞ふ蝶のきけんや畔の青疊　伊豆　梅鶴
よき水も出る木の下や芭蕉　肥前　我慣
菊咲て毎日廻る酒屋かな　能登　昇旭
追加　よき道の又殖てあり花の山　柳枝

向勝堂其石令師評

首　またくと思ひし花も盛りか那　駿河　篤山
軸　雪の日やなんや揚ても へぬ米　京　松廷
三　三日月ハ無事に時雨の通り鳧　豐後　卜居
朝夕に鵙りの囀む山家かな　近江　琴風
世の中をえらぬ顔して蝦汁　越中　松亭
追加　稗ハ道の栞なり鳧花の蔭　其石

一刀堂和仙令師評

首　鶯や聲どまりし今朝の雪　武藏　業橋
軸　塞の入忘る、鵙の日和かな　羽后　月舟
三　仰き見る石碑の前や初櫻　信濃　青逸
不器用なのか用に立鶴山子が那　若狹　士口
帰の山表も裏も無り鳧　常陸　壽健
追加　露からぬ身も彌婿し花盛　和仙

明池園亀樂令師評

首　法れ舞届きしものか時雨けり　伏見　亀勢
軸　雨も暮日和も暮る青田かな　攝津　春樹
三　松風の鉄に詣ま初袷　石見　一阜
招いたら来さうな雛の笑顔かを　備前　双石
初秋も早う来に鬼鞍馬口　河内　雨夕
追加　廣かるや異なる原の花の雲　亀樂

永日庵花醉令師評

首　鶴も寝ふやう春日和や松の花　常陸　梅居
軸　風筋を取膝にして晝寐哉　相模　登旭
三　攀らる、田の用水や杜若　津輕　里川
甘さうな崇の露る牡丹かな　美濃　清泉
覺へある顔や日傘のかたけ振　武藏　月所
追加　雪の窓花の明りと成にけり　花醉

餘興點競急寄集

五升庵百可宗匠撰

天　散る雪を花と詠光て里神樂　近江　藤水
地　よふる村をよせて一社の神樂かな　若狹　里梅
人　寄り火に雪のちらつく時雨かな　近江　貝月
追加　慣ミて卯けハ晴る、時雨かな　百可

芦丸家月更宗匠撰

天　誠堂米土蔵に納光て納豆汁　京　巴水
地　昔巻の儀座に着て納豆汁　美濃　藍潤
人　思ひかけのふて馳走や納豆汁　京　金谷
追加　へつらはぬ腹実出して納豆汁　月更

枯魚堂魚水宗匠撰

天　歩行ねかる暮るゝ小春かな　伊賀　喜笑
地　京へ来て蜘にさへ、小春かな　京　松逐
人　鳶の舞ふ空に色ある小春かな　但馬　萬水
追加　心して石の文字見る小春かな　魚水

荷柿舍華朴宗匠撰

天　水仙や人の氣つかぬ日のゆき　近江　眞月
地　今日の茶に出す水仙や走り　河内　向水
人　しまやかよみ盛り尽しぬ水仙花　京　銀羅
追加　水仙やふとこへ寒に花工み　華朴

九竹園文厨宗匠撰

天　加茂川の闇白き千鳥かな　京　指月
地　波の音低し月夜の千鳥　丹後　晴霞
人　寒氣さす舩し草風や千鳥　尾張　白鷹
追加　荻ハ寝ふ聲なく迎て千鳥　青芥

甘泉亭琅暁宗匠撰

天　送らるゝ人に引るゝ寒さかな　京　松逐
地　野の鳥今日に追るゝ口寒か　仝　旭水
人　老に今の寒さにつかく　下總　鶴鳳
追加　釣竿の白の寒さかな　琅曉

淺花園聴雨宗匠撰

天　あらけなく物の好て千炭　大坂　客月
地　引なやむ車のあと炭俵　尾張　水郊
人　留主守やに数へつしたの炭の所　京　月鵬
追加　炭次や外に数ハ千鳥の夜　聴雨

不識庵聴秋宗匠撰

天　世を捨て錦にまさる紙子かな　京　紙美

第拾六 同 評 百十五点 大阪 鬼斗

第拾七 同 評 百十四点 京 豐後 素水

第拾八 同 評 百十三点 伊 豐後 巴山

第拾九 同 評 百十二点 京 豐後 一月

第二十 同 評 百十一点 江 豐後 水月

第廿一 同 評 百点 京 豐後 月

第廿二 同 評 九十九点 近 豐後 月

第廿三 同 評 九十八点 京 豐後 月

第廿四 同 評 九十七点 安 豐後 月

第廿五 同 評 九十六点 鄙 豐後 月

第廿六 同 評 九十五点 佐 豐後 月

第廿七 同 評 九十四点 小 豐後 月

第廿八 同 評 九十三点 世 豐後 月

第廿九 同 評 九十二点 保 豐後 月

第三十 同 評 九十一点 島 豐後 月

第三十一 同 評 九十点 常 豐後 月

第三十二 同 評 八十九点 陸 豐後 月

第三十三 同 評 八十八点 武 豐後 月

第三十四 同 評 八十七点 藏 豐後 月

第三十五 同 評 八十六点 野 豐後 月

第三十六 同 評 八十五点 坊 豐後 月

第三十七 同 評 八十四点 雲 豐後 月

第三十八 同 評 八十三点 伯 豐後 月

第三十九 同 評 八十二点 耆 豐後 月

第四十 同 評 八十一点 常 豐後 月

第四十一 同 評 八十点 陸 豐後 月

第四十二 同 評 七十九点 武 豐後 月

第四十三 同 評 七十八点 藏 豐後 月

第四十四 同 評 七十七点 野 豐後 月

第四十五 同 評 七十六点 坊 豐後 月

第四十六 同 評 七十五点 雲 豐後 月

第四十七 同 評 七十四点 伯 豐後 月

第四十八 同 評 七十三点 耆 豐後 月

第四十九 同 評 七十二点 常 豐後 月

第五十 同 評 七十一点 陸 豐後 月

第五十一 同 評 七十点 武 豐後 月

第五十二 同 評 六十九点 藏 豐後 月

第五十三 同 評 六十八点 野 豐後 月

第五十四 同 評 六十七点 坊 豐後 月

第五十五 同 評 六十六点 雲 豐後 月

第五十六 同 評 六十五点 伯 豐後 月

第五十七 同 評 六十四点 耆 豐後 月

第五十八 同 評 六十三点 常 豐後 月

第五十九 同 評 六十二点 陸 豐後 月

第六十 同 評 六十一点 武 豐後 月

第六十一 同 評 六十点 藏 豐後 月

第六十二 同 評 五十九点 野 豐後 月

第六十三 同 評 五十八点 坊 豐後 月

第六十四 同 評 五十七点 雲 豐後 月

第六十五 同 評 五十六点 伯 豐後 月

第六十六 同 評 五十五点 耆 豐後 月

第六十七 同 評 五十四点 常 豐後 月

第六十八 同 評 五十三点 陸 豐後 月

第六十九 同 評 五十二点 武 豐後 月

第七十 同 評 五十一点 藏 豐後 月

第七十一 同 評 五十点 野 豐後 月

第七十二 同 評 四十九点 坊 豐後 月

第七十三 同 評 四十八点 雲 豐後 月

第七十四 同 評 四十七点 伯 豐後 月

第七十五 同 評 四十六点 耆 豐後 月

第七十六 同 評 四十五点 常 豐後 月

第七十七 同 評 四十四点 陸 豐後 月

第七十八 同 評 四十三点 武 豐後 月

第七十九 同 評 四十二点 藏 豐後 月

第八十 同 評 四十一点 野 豐後 月

第八十一 同 評 四十点 坊 豐後 月

第八十二 同 評 三十九点 雲 豐後 月

第八十三 同 評 三十八点 伯 豐後 月

第八十四 同 評 三十七点 耆 豐後 月

第八十五 同 評 三十六点 常 豐後 月

第八十六 同 評 三十五点 陸 豐後 月

第八十七 同 評 三十四点 武 豐後 月

第八十八 同 評 三十三点 藏 豐後 月

第八十九 同 評 三十二点 野 豐後 月

第九十 同 評 三十一点 坊 豐後 月

第九十一 同 評 三十点 雲 豐後 月

第九十二 同 評 二十九点 伯 豐後 月

第九十三 同 評 二十八点 耆 豐後 月

第九十四 同 評 二十七点 常 豐後 月

第九十五 同 評 二十六点 陸 豐後 月

第九十六 同 評 二十五点 武 豐後 月

第九十七 同 評 二十四点 藏 豐後 月

第九十八 同 評 二十三点 野 豐後 月

第九十九 同 評 二十二点 坊 豐後 月

第百 同 評 二十一点 雲 豐後 月

追加 餘興 二百十点 雅名順表

追加 餘興 二百十点 趣

追加 餘興 二百十点 竹

追加 餘興 二百十点 東

追加 餘興 二百十点 雲

追加 餘興 二百十点 若

明治廿二年三月九日觀風艸紙第廿號附錄

京都俳諧道場開設披露內國大互評發句輯

本評及互評共上坐丁摺各呈

題 春之植物 夏之生類 隨意

出詠各君評

各秀逸卷納

右五評ノ內一句ニシテ五評以上通リ句ノ点ヲ合算シ其〆点ノ第一ニ積景師便葉書壹千枚全號貳ニ全葉書五百枚第參ニ貳百枚第四ニ リ第十迄百枚ヲ、第十壹ニ リ廿迄五十枚ヲ、余ハ第百番迄ニ配當ス

本評 各選

栗ハ本香宗匠　梅薄柿舎華朴宗匠　枯魚堂魚水宗匠　九竹園青芥宗匠　芙花園聽雨宗匠　甘泉亭瑣曉宗匠　白雀園正祇宗匠　紅翠園花飾宗匠　菊ハ本知古宗匠　魁生園黄公宗匠　喜ハ堂一腹宗匠　菊ハ家無的宗匠　六々園朝翠宗匠　大鈡園照女宗匠

伊豆瀧ハ本連水宗匠　東京桂花園桂花宗匠　美濃帶徑園祿翁宗匠　羽後弄月園唫風宗匠　仙臺香昇廬市山宗匠　甲斐梅卷園白隣宗匠　阿波螢花園大雲宗匠　豐後臥龍園成雲宗匠　岩代貪風舎桑月宗匠　越后雪ハ本遙我宗匠　周防香祖園弘奠宗匠　阿波松乃本苔溪宗匠　越後芦曉庵難濤宗匠

右廿七評ニ秀逸組表紙付彩納軸ニ組當番像表紙付絵物帶幅ヲ、第三ニ リ第五迄全半切當選ヲ、呈ス

本評黄雲亭猶雄宗匠撰

右秀逸組表紙付彩納並赤毛布五枚ヲ題物ニ赤毛布參枚第三ニ リ第五迄全貳枚ヲ、第六ニ リ第十迄全壹枚ヲ、第十一ニ リ第廿迄赤大毛氈一枚ヲ、ヲ呈ス

追本評廿八評ノ內ニ一句ニシテ三評以上ノ通リ句ノ点ヲ合算シ其〆第一ヲ一等トシテ金側箱入一個第貳ニ リ五迄ヲ貳等トシテ銀蒔箱入壹個ヲ、第六ニ リ十迄ヲ參等トシテ銅蒔箱入ヲ呈ス

但シ壹等賞品ヲ若望ニノナキ方ハ申込ニ應シ赤毛布十五枚ト換貳等賞品ハ縞毛布壹枚ト換參等賞品ハ雷供編一反ヲ以テ交換スヘシ

尤モ丁摺印刷中ニ照會ス

題 出詠各君評

各秀逸卷納

右五評ノ內一句ニシテ五評以上通リ句ノ点ヲ合算シ其〆点ノ第一ニ積景師便葉書壹千枚全號貳ニ全葉書五百枚第參ニ貳百枚第四ニ リ第十迄百枚ヲ、第十壹ニ リ廿迄五十枚ヲ、余ハ第百番迄ニ配當ス

五句吐壹組金四拾錢
入全貳組金六拾錢
全參組金七拾五錢
花全五組金壹圓
以上沖之

有御出詠組數ニ不拘入花ノ外ニ互評積景トシテ郵便葉書十枚御送出シノ事
若入花及出景ニ不認ノ分ハ清記相除キ可申候ヿ
雖遠隔之分ハ可成郵便小爲替ヲ書信便ニテ御送付有之度且都合ニ リ郵便切手代用ヲ諾スト雖モ必ス壹割増ノヿ
尤モ入花到着次第直ナニ受取証郵送ス

清記始　三月十五日ヨリ
〆切　四月十五日堅不延

尤モ詠歌着順ニ清記ノ印刷ニ附シ全月廿六日迄ニ製本シ出詠各君ニ壹部ヲ、及互評抜萃用紙トシテ配呈スヘシ

開卷　五月廿五日

京都俳諧道場ニ於テ執行ス

必ス延期不致候ヲ別段御案內不申候間當日御來場ヲ希待ス

發起

早苗社　瓢文竹外草社　友明生喜社　柳教昇旭社　洛風竹若社　養成葉若社　清流風蕉香社

補功

昇明社　昇友社

詠草投込所　京都俳諧道場　京都御前通二條北ニ入農屋町廿一番戸

観風會艸紙發行部

幹事　服部稲兄

附言

一當番ハ〆切翌日必ス不延候ヿ
一出詠者ハ必ス抜萃シ積景トシテ葉書十枚出景ノヿ
一出詠者一名ニテ數組御出詠タリトモ積景ハ一名分ノヿ
一清記本ハ題自期日ノ確記呈仕間遠隔ノ分ハ郵送中日數ヲ經テ不着ノ節ハ物照會被下度候ヿ
一開卷後行後五日間內ニ各本評互評共上呈ヲ印刷ニ附シ寄呈ノ規別ニ付若延日ニ及候得者郵便先揚ヲ以テ物替仕アルモ不苦候ヿ
一開卷當日ノ景況報知御望ノ向キハ往復葉書ヲ以テ御申込ニアレ直ナニ物答致候ヿ
右規則御熟覽ノ上早々御出詠アラソヿヲ希望ス

京都府上京區第廿五組
農屋町廿一番戸
發行所
京都俳諧道場內
觀風艸紙發行部

京都府下京區第十二組愛宕町五十番戸
編輯兼發行者　川島喜助
同　下京區第十三組真宗寺前ノ町
印刷人　桂田專太郎

羽都小岡村の有志者俳諧改良會を
を設きおゐ三日何々より投票をせしに
此頃益す盛況なりて承諾せざと

有　鶴俊通信

俳客　上張羽洲老越年せらと其他三四の俳子入込落とり
俳柳　新潟梓川庵の編なる蕉塚集は四編中今編集中なり
ふたゝひ杖　大坂燕巣庵篁並老よりふたゝひ杖くれへる
右稀覯の集冊なりて本會員へ送られたり
愛京誌　東京梓明社より風□編とを本會へ送られたり
佛英米設遊　本會特別贊成會員斎藤久保田米僊子は本月
十五日出杖にて佛蘭西巴里府より米國英國等へ設遊漫杖
せられたり依而ハ時々彼地の景况を知らる害なれハそ會
の通信を次號に登録すへし

本會客員
一金七拾錢　美濃國橋碌翁君
右道場設置補助有志トシテ御送附受納候間爰ニ鳴謝ス

本會々員
陶器火鉢　貳對　京都　入江鎚一友君
右道場へ有志トシテ御送附受納候間爰ニ鳴謝ス

本會々員
一文臺壹個　京都　溝口月郊君
右道場へ有志トシテ御送附受納候間爰ニ鳴謝ス

上野國緑野郡三波川
金貳拾錢　新井文水君
右設立補助有志トシテ御送附受納候間爰ニ鳴謝ス

常陸久慈郡爪連村
金貳拾錢　亀屋亀遊君
右道場設置補助有志トシテ御送附受納候間爰ニ鳴謝ス

陸中國伊郡花輪村
五拾錢　横澤花扇女君
右設置補助有志トシテ御送附受納候間爰ニ鳴謝ス

京都俳諧道場内
各社出張所

○観風草紙請求ノ代價且餘興發句入花等御送付之向可成丈ケ便小爲替よて御送付被下度萬一不便にて郵券代用之節ハ郵便切手ヲ諾スレトモ壹錢ノ切手ヲ以テ御送附ヲ希ふ
○観風草紙請求者諸君にして俳句登録ノ料別ニ御添ノ向モ有之候得共草紙請求者の俳句登録無代價ニ候間爲念爰ニ廣告ス但シ餘興共進會發句集ヘ出録ハ別ニ入花ヲ要ス
○観風草紙餘興共進會發句集ヘ御出詠アルモ観風草紙ノ代價八錢（但シ送費）の不送向ハ草紙送セス候間草紙望ノ諸君ニシテ出詠入花の外ニ草紙ノ料御送附アリタシ
○本會ヘ入會ノ諸君ニシテ観風草紙ノ料金亦ハ餘興共進會句稿等ヘ御出詠ノリテ其入花定額ノ全テ御送附ノ向モ有之候得共右観風草紙ハ本會定則第百七條ニ因リ無料ニテ頒ツモノ故共進會入花ハ定額ノ半額ニ候間定則書御熟覧アリタシ

観風草紙發行部

○各社月並各集ヘ御出詠又ハ登録ヘ御出録ノ諸君ニシテ其出詠入花ノミヲ御添アリテ観風草紙ヲ無代價ニテ御望ミノ向モ有之候得共御望ミニ應シカタシ候間丁揃御望ミノ出詠猶右ハ観風草紙ヲ別ニ御購求被下度候
猶月並ヲ餅トモ一揃ヲ別紙ヘ致観風草紙ヘ上堂ヲ登録致候マテニ附為念爰ニ廣告致候

京都俳諧道場内
各社出張所

○本紙附録之通御俳諧道場設立披露内國大たかひ評集ヲ相催候間通紙御覧之上御出詠奉祈候猶通紙御入用ノ向ハ早く御申越次第郵送致候
但シ通紙御望ミアルモ〆切ニ迫候節ハ謝絶ス

京都俳諧道場内
各社出張所

終